ようちこ

機のデザイン変遷について検証したい。 本著では、ギーディオンの手法を参考にしつつ、日本の近代化に果たした工業製品のひとつであるテレビ受像 会とモノとの関係を考察したS・ギーディオン(1894~1968)は、重要な示唆を与えてくれている。 中でモノをつくる行為であり、近代化を推し進めた工業製品の歴史をデザインの視点から考える際に、人と社 で受け入れられてきたが、デザインも製品価値をつくる役割を担ってきた。デザインは人と社会との関わりの 度経済成長期を経て現在に至るまで日本経済を支えてきた。日本製品は、価格、性能、品質の優秀さから世界 目しまとめたものである。日本における工業製品の発展は、第二次世界大戦後(以下、 本書は、日本における初期のテレビ受像機のデザイン変遷と、その過程で誕生した家具調テレビについて着 戦後)の復興期 から高

生活を支える文化、それらの背景にある時代と地域が無関係ではない。 セスを学ぶことで日本独自のデザインを創出するようになった。すなわち、デザインは、製品を支える技術と 日本製品のデザイン開発は、 欧米製品の模倣から始まったが、欧米からデザイン手法、デザインプロ

費されてきたモノのひとつである。 番組を生活の場で享受するためのモノとして、生活環境に適合しながら変容されてきており、大量に生産、消 なく、新たに生まれたシステムとして現在の私たちの生活にも大きな影響を与えている。テレビ受像機は放送 20世紀になって発明されたテレビジョン(以下、テレビ)は、それまであった仕組み、 道具の置き換えでは

年に走査線40本で「イ」の字を送受信するテレビ実験に成功したことに始まる。戦争で開発は一時中断するが 日本におけるテレビ開発は、 欧米からの技術導入により製品開発は再開し、 1923 (大正12) 年に高柳健次郎が「無線遠視法」なる着想を提唱し、1926 1 9 5 3 (昭和28) 年に本放送を開始した。 テレビ受像

とは、今後、普及が予測される製品において、生活者に向けたデザイン開発を推進するために有効である。 レビ受像機も1975年に91%となる。大衆化した製品であるテレビ受像機のデザイン変遷について知るこ の国内普及率は、官民双方の施策もあり1965年に白黒テレビ受像機が95%に達し、普及が遅れたカラー

具調テレビの形態特徴の成立過程については明確にされているとは言えない。 の「嵯峨」に代表される和風ネーミングが市場に浸透したために日本独自のデザインとされている面もあり、 使用されるようになった経緯についても明確にされていない。また、松下電器産業株式会社(以下、松下電器) イン変遷の視点から日本の生活にどのように適合しながら変容したかについての情報は、正確でないまま言説 となっている面も多い。特に、 テレビ受像機に関しては、 技術史、産業史としての研究や文化史、生活史としての文献、書籍が多く、デザ 昭和40年代に主流となった家具調テレビについては、「家具調」の呼称が生まれ

ことを望むものである。 様式となったかの理解を深める。ひいては、日本独自のデザイン開発における特徴に関して新たな知見を得る するまでの経緯を明らかにすることで、 する。テレビ受像機は、現在では日本の生活に不可欠なモノとなっているが、生活の場に導入され普及し成熟 本書では、 日本におけるテレビ受像機のデザイン変遷について、生活者と生産者の両視点から検討 欧米の影響を受けた製品が日本独自のデザインを獲得し、 如何にして

じられ 考えられるが、その製品がつくられ、売られ、使用された時代と地域と人によるところが大きいと言えるだろう 家庭用電気製品 人工物におけるデザインについて見た場合、その意味のひとつはモノの外観であり、美意識と好き嫌いで論 な対象となり得る。何故ならば、 .た結果は製品となって外観に現れる。デザインが変容する過程で差異が生ずるのは多様な要因があると .る面がある。もうひとつはモノを生産するために計画する行為である。すなわち、様々な条件を基に計 。 以 下、 家電製品)のデザインについて、前述の観点から考察する際にテレビ受像機は典型 日本におけるテレビ受像機は、 欧米製品の影響を受けて導入された機器で

からも注目されてきたからである。 ら普及期に至る間には三種の神器のひとつとして生活者の憧れの製品であったため、 あるが、現在では日本人の生活に浸透し、 日本企業が開発を先導してきた製品だからである。また、導入期か 常に生活者からも生産者

及するまでを対象とすることの意義は大きい。 得するに至るまでのデザイン変遷と要因を考察する上で、 とされている。 その中でも、 欧米製品を模倣して開発され市場導入された製品が、時代と文化を背景にして独自の様式を獲 昭和40年代に生まれた家具調テレビは、 日本独自の造形発想によるデザインで様式をつくっ テレビ受像機の草創期から家具調テレビが誕生し普

レビの成立経緯について論述する。 第2章では日本におけるテレビ受像機のデザイ ン変遷について、 第3章、 第4章では特に家具調テ

公報文献等の史料と当時のデザイナーへのヒアリングを基に考察する。 況を明らかにするために、1953(昭和28)年のテレビ本放送開始前後から昭和30年代を中心に新聞・社史・ テレビ受像機の草創期から普及期」では、 日本におけるテレビ受像機の草創期から普及期に至る状

報文献等の史料と当時のデザイナーへのヒアリングを基に考察する。 インが日本独自のデザインに変容する過程について明らかにするために、昭和40年代を中心に新聞、 レビの衰退経緯について考察を加える。 白黒テレビ受像機の成熟期からカラーテレビ受像機の普及期」では、欧米製品の影響を受けたデザ さらに昭和50年代についても、 家具調テ

新聞、社史から明らかにし、 にする。 家具調テレビの誕生と展開」では、「家具調」と「家具調テレビ」の呼称が生まれた経緯について、 家具調テレビの典型とされる「嵯峨」の誕生とシリーズ展開について詳細を明確

テレビの創作経緯について、文献史料とヒアリングから明らかにする。 ステレオ「飛鳥」との関係、校倉造りの造形イメージの形成について検証し、日本調デザインとされる家具調 「第4章 家具調テレビのデザイン創出過程」では、家具調テレビの典型とされる「嵯峨」について、家具調

ついて、史料とヒアリングから得られた情報を手掛かりとして考察し、正確な経緯を再現し検証することとする 以上、 第1章から第4章までを通じて、 日本におけるテレビ受像機のデザイン変遷と家具調テレビの成立に

注

- 1 のテレビ受像機の中で、特に、 本書で「家具調テレビ」とは、 コンソールタイプで和風ネーミングの機種を言う。 家具の様式を取り入れた家具のようなデザイン、 すなわち「家具調デザイン」
- 2 本書で「デザイン」とは、製品の用途、機能を実現する構造、 るよう美的に統合した状態、 またはそのための行為を言う。 形態、材料、模様、 色を生活者に受け入れられ
- 3 本書で片仮名の「モノ」は、物理的な存在であることを強調するときに使用する。
- 4 Siegfried Giedion (1894 -(1962) 他がある。 ン運動のもっとも有力な理論家であり批評家である。著書に『空間・時間・建築』(1941)、『永遠の存在』 1968):スイス生まれ、 建築・美術史家であると同時に、近代建築・デザイ
- 5 本書で「テレビ」とは、テレビ番組とテレビ番組を放送するテレビ放送局、受信するテレビ受像機、それら全 てをシステムとして見たときを言う。
- 6 産業株式会社を使用する。 2008年10月1日よりパナソニック株式会社に社名変更しているが、 本書では、 当時の社名である松下電器

目 次

はじめに

第1章 草創期から普及期のデザイン

13

- テレビ受像機の発明
- ブラウン管と製品形態 (1) ブラウン管の偏向角度

17

- (2) 画面の形状
- テレビ受像機の基本形態 (1) コンソールタイプ 19
- (2) テーブルタイプ
- 3 コンソレットタイプ 19
- (4) ポータブルタイプ
- 日本におけるテレビ本放送開始以前の状況

20

(1) 先進諸国の製品状況

日本におけるテレビ受像機の草創期 (2) 日本における開発状況

24

2

- テレビの啓蒙
- 海外製品からの影響
- 企業におけるデザイン開発

32

7

昭和30年代のテレビ受像機

3

テレビを取り巻く状況 38

形態の変容 松下電器のデザイン変遷 51

(1) コンソールタイプ

51

(2) テーブルタイプ 54

(3) コンソレットタイプ 57

(4)画面サイズと形態 62

(5) 音の表現と形態

(6)操作インターフェースと形態

66

テレビの発明と製品形態

72

4

まとめ

3 2 普及のための方策 テレビの啓蒙 72

海外製品からの影響

73

73

技術開発と形態の変容

1 昭和40年代のテレビ受像機

第2章 白黒テレビ受像機の成熟期からカラーテレビ受像機の普及期のデザイン変遷

79

80

テーブルタイプの変容 テレビを取り巻く状況 キャビネットの素材と工法 テーブルタイプ グッドデザイン賞の変遷 昭和50年代のテレビ受像機 4本の丸脚付コンソールタイプ 松下電器のデザイン変遷 テレビを取り巻く状況 コンソールタイプ (2) 日本の家具調デザイン (2) 日本の4本の丸脚付コンソールタイプ (1)米国の4本の丸脚付コンソールタイプ (3) 和風ネーミング (1) 米国の家具調デザイン 108 113 81 106 92 86 118 109 122 99 97 92 112 95 93

家具調テレビ

2

3

5

まとめ

2

家具調テレビの誕生

132 132

昭和40年代のテレビ

木製キャビネットの減少 松下電器のデザイン変遷 モニタースタイルの誕生

129 125 123

5

4

セット台一体型

(1) コンソールタイプ

第3章

家具調テレビの誕生と展開

139

- (2) コンソレットタイプ 141
- (3) ローボーイタイプ
- 家具調と家具調テレビの呼称 新聞記事に見る家具調の記述 142 141

1

- (1)「家具調」単独での使用 142
- (2)「家具調+製品名」での使用
- 新聞広告に見る家具調の記述 145
- (2)テレビ受像機以外の広告に見る家具調の記述 (1) テレビ受像機の広告に見る家具調の記述 147

152

- (3) 広告記述に見る価値観表現の変化 153
- 松下電器社史に見る家具調記述 新聞広告における家具調の出現度 155
- 「嵯峨」誕生とシリーズ展開

158

2

- 「嵯峨」を生んだ市場背景
- 「嵯峨」と前機種とのデザイン仕様比較 161
- (1) 形態の差異 161
- (2) 素材表現の差異 166

嵯峨」シリーズ展開

(1)初代「嵯峨」(Aタイプ)

169

- (2)「嵯峨1000」(Bタイプ) 170
- (3)「インテリア嵯峨」(Fタイプ) 174
- (4) 脚部変形機種 177
- 3 まとめ 178
- 家具調テレビの役割

178

和風、日本調イメージの形成 家具調の呼称

2

「嵯峨」のデザイン特徴

179

- 「嵯峨」シリーズの意味 180 179

欧米の影響によるデザイン潮流 184

家具調テレビのデザイン創出過程

183

第4章

- 2 「嵯峨」開発の背景と経緯
- 松下電器テレビ事業部門史より
- (1)「旧品川工場から白黒テレビを語る」

189

- (2)「ゴールデンキャンペーンの展開」
- (3)「TC-96G《嵯峨》の開発とデザイン計画」 193

193

- (4)「時實隼太回顧談」
- 松下電器デザイン部門社内誌より
- (1)1963(昭和38)年2月1日発行『NATIONAL DESIGN NEWS』 197

198

ΙI

形態、

デザインを変容させてきた機器であるとも言える。

製品デザイン間の影響 松下電器における日本的デザイン

3

飛鳥」 「飛鳥」「宴」「嵯峨」の比較 「嵯峨」創作者へのヒアリング 創作者へのヒアリング 206 203 201

「嵯峨」が 「飛鳥」「宴」から受けた影響

214

意匠登録に見る創作の経緯 216

まとめ

5

4

「嵯峨」の独自性

2 松下電器の開発状況

3 ステレオ「飛鳥」「宴」からの影響 225

224

家具調テレビの意匠登録

おわりに

あとがき 235

草 創期から普及期のデザイン

が始まって以降であるが、 な影響を受け、どのようにして日本の生活に相応しいデザインに変容したのであろうか。 ン変遷の立場より見てみたい。 いた。本章では、日本におけるテレビ受像機の導入から普及までの状況について、 一般の生活者が初めてテレビ受像機に触れたのは、 日本の草創期から普及期のテレビ受像機におい それ以前より開発状況については展示会や新聞等で知らされて て、 1953 (昭和28) 日本製品が欧米の製品からどのよう 年にテレビ本放送 デザイ

境をつくっ が、それらの製品は生活者によって選択され様式として成立し、 る影響は大きいと言える。 本においても日常における生活者の意識と生活スタイル、 テレビは20世紀を代表する発明であり、 てきた面を見逃すことはできない。 テレビ受像機は技術開発によって機能と形態を変容させてきた 産業と生活に大きな影響を与えてきた。 テレビ受像機は、 モノとして住空間に与えてい その時代と地域の生活環 生活者のニー ズが機能 現在の

る情報 匠公報を中心に行 松下電器 そこで、 ^ 0) は、 Ŀ 0 テレ アリ 草創期 Ò デ シ ビ受像機メ ビ受像機を中心に国内、 なっ グを行なった。 より日本市場にお タを加えると共に当時 また、 カー 生活者の受容状況を客観 各社の広告、 いて高 のテレ 海外各社の製品を対象とし い販売占有率を占めるメ カ ビ受像機のデザイ タログ、 社史資料 的に把握 ン 開 するために、 と当時の て論ずる。 発に携わ 力 0) 新聞記事、 ひとつであ 製品に つ たデザ 出荷台 意 す 3 1

V ビ受像機 形態にどの 開発状 0 デ 淣、 ように反映され ´ザイ 技術開発状況 ン 変遷に たかを時系列に検証 0 47 て述べ 関 ľ 7 た ŧ 可 能な限り h 詳細 日 本の草創期から普及期 な経緯を明ら か 1 にお 0 つ、 け るテ 製

1 テレビ受像機の発明

開発された技術であった。 其 式テレ 9 2 5 テ は V 転す な ビ受像機 ピ か 大正 の実験に成功 Ź つ 円盤に等間 たことか 14 には近 年 代になって発明 10 5 月 30 日 |隔で開 した。 形態の 1 8 8 4 け 図 に英国のジョ 拠 Ś 1 だれ り所となるもの n (明治17) た穴に は、 た機械であ $\overset{\scriptstyle }{\cdot}$ よっ ニポ 年にドイツのポー 口 て画像走査する機械式 ジ・ベアード 5 Ó 機械式のテレ ひとつは、 それ 以前にテレ ル 新たに発明さ (John Logie Baird) ビ受像機であるが、 ・ニポ テ ビ受像機に代 ν (Paul Nipkow) ピ ñ を考案し、 た原理、 機械 が機 わる

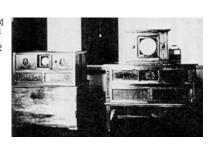


成13) 年 931 『放送の未来につなぐ図 931 『放送の未来につなぐ図 931 『放送の未来につなぐ図 1 (平 録機計 1 0 0 1 (平 1) 年 1 (平 1

受像機 があ る 0) 現 原 b, ブ 理 の ラ 8 てくる 構造がその どの 開 ウ 9 7 発も進め ン 方式を選択するかで製品の基本形態に大きな差が生まれ 年に が、 (Karl Ferdinand Braun) 受像方式としては機械式と電子式、 映像表示部品 まま形態と 6 n 7 5 た。 して現れ としてのブラウ 1 93 7 によっ 0年代になると実用 お h ´ン管) て発明され、 大きな円盤 が 映像の見方としては ド 0 イ ッの 化を目指 形を外観 ブラウン管を使用 カ た。 したテ ル か ?ら見 • フ V る エ 7型と直 ことが ル ビ受像機 L たテ デ イ ナ で ν が ピ 3

は、 0 なる着想で開発を始 ることを前 ただデ 字を送受信することに成功 本に ビ受像機 つ 柳健次郎が 1 お でな 提にして ン b で、 ても は、 いことは、 ブラウ 高級な家具の形態に似せたも 19 あて 9 1 たたため 3 23年に日本のテレ おり、 ン管 0 機械式と投射型も開発されて 车 と考えら が して (昭和5) 1 9 2 6 使用され b . る。 n 年5月、 てい 年 当初より、 3 ビ創 12月25日には、 300 始者と言 0) であっ 浜松高等工業学校での天覧時に使用 天覧という 映像表示部品としてブラウ b わ た。 たことから推 走査線 れる高柳健次郎が これ 特別の 40本のテレ は、 場に出す機械に採 高柳 **温川できる。** が ビ実験で 住宅に 無線遠視法 ン管が 図 置 7 じた 優位 用 か n 3 2

なか は 0 二 ポ 7 0 たが つ た。 たく異 仮 結果として 1 なる変容を遂げて とブラウ = ポ ·機械式 ニポ ン管方式 が進化 -機械式 では原理的 いたであろう。 のテレ して現在に な違 ビ受像機 至っ 新たな機 17 か てい は、 らテ 械を考案す たならば、 解像度の V ビ受像機 限界から普及には っるとき、 の形 テ V 態は ビ受像機 機械 必然的 O0) 至ら 形 機 1 能 態 異



61) 年 0・5『テレビ事始――イの字 で、た日』、1986(昭和 1988 (昭和



図1-6 Andrea Radio I-F-5 1939 (昭和14) 年



面

ズで行な

が確認できる

か

普及機種

から高級機種まで製品の

差別

を画

てい

ることがわ

か 化 点

で既に

欧

米先進

諸

玉

カ

各社

は

用

的

な

各画面サイズで製品化できる形態を機種展開

る。

つ

コ

ル

W

R T

が製品

コ

タ

W る。

型

コ

ン

ソ

ル

図

11

0 0

発売され

7

b

3

視型コ 製品が

ル

Η

5

力

コ

タ

R

K

図

が

つ

5

回視型コ

ル

タ

R

K

反 は

RCA Victor TT-5 1939 (昭和14) 年



GE HM-225 1939 (昭和14) 年



図1-9 Westinghouse WRT-701 1939 (昭和14) 年



図 1-10 RCA Victor TRK-12 1939 (昭和14) 年



図 1-11 GE 1939 (昭和14) 年

23

送を

9 3 6

(昭和

日

14

日に

Ÿ

ではべ

送

3

崩

放送が

可能

9

は英国

В

ВС

0

放送が

始され

家庭

3

0)

的

0

の

走査線で商品化さ

たの

は タ

9

英国

お

は

般消費者に

向

力

口

ビ受像機が

Ó

社の

宣

伝広告、

力

タ

口

/を見る

Andrea Radio

0)

カ

タ

で

製品

て載

0

Α

 \mathcal{O} 口

力

口 は テ

放送は実験段階 でゼ

か

実用段階に

向

かう

9

2

8

和 3)

月

米国

二 が

彐 V

ネラ

ル

工 5

ツ

(General Electric

Company

0)

コ

ル

で

扉 な ウ

ŧ

 \mathcal{O}

7

X

力

は

松

外 屝

\$

あ 3

す 3

る

で

障害

0 ン

ح

0

を あ n

る手 ジ

 \mathcal{O}

が

で

あ

号機

C

В

図

1

38

で扉付きを採用

T

いる。

両機種

とも当時

 \mathcal{O}

最 ピ

タ

機

が

9 タ \$ 期 込 ラ

5

3 プ

昭

和

28

に

テ

機

3

図 ラ

本

ビ

ク

が

和

35

年

力

テ

面 を

で

あ

0 t

ブ

ラ

管

面

は

球

面

で

h

オ

受信機

が

たど

0

7

1,

た家

具

0) ガ

空間 意

ち ブ

で最

も違

!感を

持 ピ

0

は

出

0)

る

は

ず

あ

0

活

で

は

V

受像機

扉 あ

は n

求 ば、

め

6

n

な

か

0

と言え

0)

味

は

ウ

ン

管を

隠

てテ

 ν

受像機

を家具に

見せ

ることに

あ

る。

テ

V

受

る

が

岌

種

 \sim

は

展開され

T イ 昭

付きの

が

高

で

あ

市

が あ

ż

つ

ŧ

あ 機 8

る

が

生活者によ

つ

て必要で

価格帯にそ

 \mathcal{O} 0 は

機能 たため

は

下

タ

4

Α

9 5

6

和

31

2月発売

0)

21

1

ン

チ

コ 17

ン

ル

年5

月発売

O

27

コ

ル

6

全

扉

ŧ

0)

0

お

X

力

きの 屝 異

開 O

発

製品

化す

Ź

が

本

 \mathcal{O} n

は受け

入

n

5

ず

か

Ź

T

つ

電器に

お

4

7

もコ

ン

ソ

ル

タ

ゔ

0)

最 n

づ

53年

月

発売の

イ ソ

チ

コ タ

ル

生活様

式

0)

Ž

n

方

が

な

3

事

例

で

9

0

0)

海 7

0

コ 0

ソ

ル

タ

は

付

きの

\$ を

> が あ

多

6

響さ

7







図 1-35 Admiral 1948 1948 (昭和23) 年



早川電機「ステレビジョン」広告 『毎日新聞』、1960 (昭和35) 年10月



図 1-58 シャープテレビ広告 『毎日新聞』、1957 (昭和32) 年10月8日



図 1-59 松下 S-14L1 1957 『テレビ事業部門25年 史』、1978 (昭和53) 年



図 1-60 松下 F14-B8 1962 『テレビ事業部門25年 史』、1978 (昭和53) 年

6 よう 音 初 ス IV テ 形 配 で 力 タ 0 力 面 置 良 0) 0 面 カ V あ オ ま X z 良 を 電 る 放 3 工 は 兀 配 材 気 使用 送39 図 ザ 角 夫を は は 型 が で 天 コ 表現 状 始 凝 す 0) 面 0) まる は で デ 3 5 像 58 ス h す Ш 種 配 ス 0) ピ Ź 置 ピ 前 臨 始 が It 発売 手段とし 場 ź 8 z な 力 表現 感を 既 部 ピ 力 る n 音 品 Z 7 が デ 能 サ \mathcal{O} が コ n 0 力 b 0) 置 T 良 る 材 る 配 を る \$ Z z た 色 0) 利 と形 3 8 は 加 n 用 ズ 成 ッソ z 法 で る 能 有 か な が n T 脂 必 表 イ で タ 効 上 5 が h 要 成 で ン 0) 0) 形技 現 問 で あ 3 ネ 表 す な で 0 題 丰 あ ッ る 袖 現 3 術 活 は か ヤ る タ た た が 6 ピ で 進歩 め 面 \emptyset で ッソ 面 わ が 各 す ス 0 n 出 音 ピ 視 60 社 る ス 7 現 聴 ピ 7 は を は ル で しつ 音 9 タ 0 ス 0) 3 力 7 5 配 る ピ イ 力 1 例 置 せ は る る 年 で ŀ. 良 カ は か 見 図 前 あ 力 が \mathcal{O}

な

つ 1

7

か

面

ス

ピ

題、

 \mathcal{O}

化 イ

操作イ タ フ エ

方式 0 チ ヤ ン ネ ル選局 は 先に普及 7 b たラ ジ オ受信機 0 操作 法で \$ あ

h

ż

ガ 8

ス

0

66

ヤ

ピ 1

ネ

ッソ

が

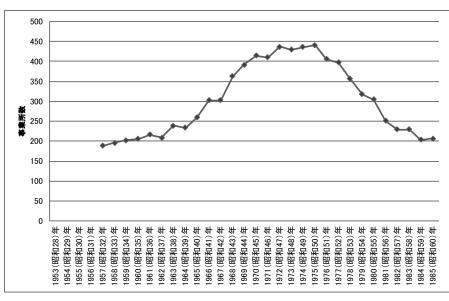


図 2-31 ラジオ、テレビ、ステレオ用キャビネット製造事業所数

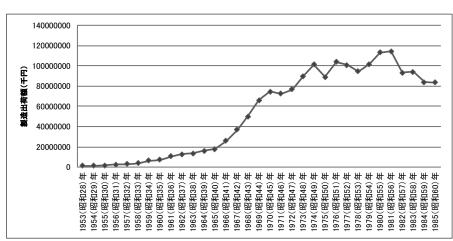


図 2-32 ラジオ、テレビ、ステレオ用キャビネット製造出荷額

一産高 高 す を は が 減 少 Z せ わ る 7 0 7 が 1, 0 セ 昭 ッ 和 50 台 年 代 塑 0 後 が主 半 力 な ٤ 3 な ٤ h モ = 木 タ 製 セ ス ツ タ イ 台 ル 0) が 生 産 主 流 が 丰 ٤ な ヤ ピ 0 ネ た ツ \Diamond 生

産 を前 提 50 E 塩 年 ピ た 大手 な 0 木工 7 製造 事業所 用 出 荷 額 生 ピ が 産 持 粧 が 集約 板 3 0 n 3 フ 7 n オ しつ た る た ル デ め \$ で 関 あ ン わ ろ ガ ć 加 事 が 業所 主流 数 な が 減 h 少 大量 す 3 生 0)

表紙 像機 タ ため 4 送 3 ア ピ ネ 和 ス ツ ć \mathcal{O} お 豪華 ス タ 50 () 2 テ ザ 年 す 方 7 製造 は w る な V 類 \mathcal{O} 6 両 オ ン 音声 放送 出 を設 少 タ 荷 た に 現 額 多 あ モ 7 和 契 重 二 る 0) 40 減 タ 放 開 年 変容 少 送 魁 3 納 セ か を す ス ツ n 抑 3 タ ス は 3 生 せ 時 イ テ ż 台 モ テ 4 期 め 二 ル V n と推 タ 0 で た家具 V 0) デ 代表 木 ピ 型 あ 受像 測 ザ 9 Ħ 3 ス 0) 家具 的 8 で タ イ ŧ 剪 イ な ン 0 (調デ (感表 を 機 年 ル 自 生 種 0) 体 良 6 ピ 現 to ボ テ 月 を 0) 17 É Ĕ 音 V 7 O昭 松 ピ 具 0 は ٤ ン ツ 受像 か 和 0 と言 見 け 電 音 53 Α 台 器 V せ 0) テ 良 年 を 3 ź フ 0 P る 0 ス V b ザ デ 始 ピ ピ 二 心 が 受像 チ # ŧ 1 力 4 ヤ シ イ 0 ラ 力 ス た が は ン 現 テ 音 主 7 で 力 テ 見 n 4 流 タ 声 V 多 せ ピ モ 口 \mathcal{O} ス ガ 3 ツ =

あとがき

像機を製品化すると発表しました。デザイナーたちが半世紀前に描いたアイデアスケッチやプロトタイプモデ 国の総合電機メーカーLGはフレキシブル有機ELディスプレイを採用した65インチ「巻き取り式」テレビ受 紙のように曲がることでした。そして、ラスベガスで開催された世界最大の家電見本市CES2019で、韓 ルが現実になっています。 夢を描くことが仕事のひとつであるデザイナーにとって、テレビ受像機の未来は、壁に掛けることであり、

プルな額のようになりました。このようにテレビ受像機のデザインは技術革新によって生まれ、 スマー 者の受容によって定着してきたと言えます。 きな家具のようなテレビ受像機は、液晶パネルに代表される薄型表示デバイスによって奥行き数センチのシン 世紀で最も変わったのは、 ビの草創期と比べて現在のテレビ視聴スタイルは大きく変化し、 フォンで、自動車の中ではダッシュボ リビングに置かれているテレビ受像機ではないでしょうか。ブラウン管の入った大 ードに取り付けた画面で観ることができます。 住空間だけでなく街中や電車の中では かし、この半

レビ受像機を住空間に受け入れる上で最適なデザインでした。 「家具調テレビ」のデザインは、テレビの普及期において、それまで生活者が見たこともない製品であったテ

多くのデザイナーは家具調テレビのスケッチを描き、デザインモデルをつくっていました。 筆者が1979年に松下電器に入社し、 テレビ本部デザインセンターでデザイナーとして仕事を始めたとき 本書は、 筆者がテ

を良しとしたいからです。 残すよりも、 レビ受像機のデザイン開発に関わるよりも前に開発された製品を対象として記述しています。歴史は当事者が 他者が一定の距離を置いた上で疑問を持つことにより、 より客観的で、 批判的な視点で残すこと

木目同調エンボス加工が開発されました。こうした本物に似せたモノづくりがなぜ必要で、どのような流れ て使用されていた木目塩ビシート、木目ホットスタンプシートなどです。各社が如何に本物らしく見える木目 でした。その主な理由は、 スデザインとしてプロトタイプモデルにしていました。 会社のデザイン部門としては、将来、実現が可能になるであろう技術を考慮してデザインし、それをアドバ 言ってもブラウン管の時代ですから、 んな中で、 なわれたのかを知りたいと思いました。 トをつくるかで印刷技術を競っていました。本物らしく見えるだけでなく触っても本物らしくするために 和 の時 若いデザイナーとして家具調テレビのデザインに対しては疑問がありました。特に、 代に各家庭の居間で観られ 生活スタイル、居住スタイルは簡単には変わらないとの認識があったためです。そ 20インチから29インチ程度の画面でした。テレビ受像機を開発製造する 7 いたメイ 本書の基になる研究調査のスタートはここにあります。 ンの大型テレビ受像機は、全て家具調テレビでした。 しかし、現実に製品化されるデザインは家具調テレ 表面材料とし

が商品化されました。 ありません。そして、 各社でテレビ受像機のデザイン開発に関わっていたデザイナー はありません。 980年にソニーがモニター しかし、 後を追うようにモニタースタイルのデザイン開発が行なわれ、 生活の場面で使用されるテレビ受像機が一気にモニタースタイルになったわけ -スタイ ル Ø 「プロフィール」を発売したことで、 は誰もが、先を越されたと悔しく思ったに違い 状況が一変しました。当 多くの類似したデザイン

現場では、 を発売しました。1990年代後半になると、ノートパソコンで使用する液晶パネルの需要が高まり、液晶パネ でした。1993年松下電器も14インチカラーフラットパネルを採用した「カラーテレビ受像機TH-14F1」 ました。1980年代は競って液晶パネルの開発を進めましたが製品化できたのは6インチ程度の小型のもの デバイスでした。1983年カシオが2・7インチモノクロ液晶を採用した「ポケット型液晶テレビ」を発売し . のカラー化、画面サイズの大型化、画質の高精度化が進んでいきました。しかし、テレビ受像機の製品開発 生活者が家具調テレビからモニタースタイルを受け入れるまでの期間に進められていた技術開発が薄型表示 ブラウン管で実現している画面サイズを薄型表示デバイスで実現できるとは思っていませんでした。

60インチのテレビ受像機が普通に購入できるようになり、 した。その後の20年近い間 私たちは生活の中に取り込んできています。 1年にシャ ープが で、テレビを取り巻く環境、 〈21世紀のわが家のテレビ〉 特に技術革新は目覚ましいものがあります。50イ として「20インチ液晶テレビAQUOS」を発売しま ハイビジョンは4K、 8Kと解像度を上げ、 ンチ、

そして、 型化、高精度化、フレキシブル化は、製品となってこれからも私たちの生活の中で活かされていくでしょう。 もに新しいデザインが生まれてきました。テレビ受像機は常に技術開発を先導してきた製品です。 みだすの さらに次の夢を描いて実現していくことでしょう。未来のデザイナーたちがどのようなデザインを生 インはそれぞれ 本書が少しでもお役に立てれば幸いです。 の時代のデザイン潮流はもちろん、技術開発が密接に関わって お 技術革新とと 大型化、薄

最後に本書は、 日本生活学会、 日本デザイン学会、 芸術工学会に投稿した論文を基にして加筆修正したも

三樹書房編集部の皆様、特に木南さんには、読みにくい文章、分かりにくい言葉などを整えて頂いたことにつーの方々より貴重な資料提供とヒアリングへのご協力を頂きました。深く感謝いたします。編集にあたってはです。主題である家具調テレビのデザイン開発については、当時の様子を知るために松下電器の先輩デザイナ く感謝します。 いてお礼を申し上げます。また出版について多くのご助言を頂きました三樹書房の小林さん、 山田さんにも深

協力 ソニー株式会社

増成和敏 (ますなり・かずとし)

芝浦工業大学デザイン工学部デザイン工学科生産・プロダクトデザイン系教授。

芝浦工業大学理工学研究科 機械工学専攻デザイン部門教授。

博士(芸術工学)2010年3月九州大学。

1979年 九州芸術工科大学工業設計学科卒業。

2007年 放送大学大学院文化科学研究科修了。

2010年 九州大学芸術工学府 博士後期課程修了。

1979年 松下電器産業株式会社 (現パナソニック株式会社) 入社。

1980年 テレビ本部デザインセンター配属。

海外市場向け(特にPAL、SECAM方式地域:欧州、中近東、中国)のテレビ受像 機のプロダクトデザインを担当、その後、国内市場向けテレビ受像機のプロダクト デザイン、ディスプレイデザイン、プロジェクションテレビ、液晶テレビ、伝送品 などのデザインを担当。

1993年~松下通信工業株式会社 (現パナソニック株式会社) デザインセンターに異動。カー オーディオ、カーナビゲーション機器のプロダクトデザインと GUI デザインを担当、 その後、携帯電話、情報通信機器のプロダクトデザインと GUI デザインを担当。

2006年~2009年 「新日本様式」協議会事務局次長。

2009年~現職。

家具調テレビの誕生

テレビ受像機のデザイン変遷史

2019年 4 月25日 初版第 1 刷発行

著者 增成和敏

発行者 小林謙一

発行所 三樹書房

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 1-30 TEL 03(3295)5398 FAX 03(3291)4418

http://www.mikipress.com

組版·装丁 言水制作室

印刷・製本 シナノ パブリッシング プレス

©Kazutoshi Masunari 三樹書房 Printed in Japan

本書の内容の一部、または全部、あるいは写真などを無断で複写・ 複製 (コピー) することは、法律で認められた場合を除き、著作 者及び出版社の権利の侵害となります。個人使用以外の商業印刷、 映像などに使用する場合はあらかじめ小社の版権管理部に許諾を 求めてください。落丁・乱丁本は、お取り替えいたします。